

知り合ったばかりの人に、私は時々「あなたの夢は何ですか？」と聞くことがある。あまりにも青臭い質問なので、時と相手を選びはするのだが、たいてい人はまず、とまどいの表情を見せる。子ども時代は「大人になったら何になりたい？」としょっちゅう聞かれていたのに、大人になってしまったら誰も将来の夢など聞いてくれない。聞いてくれないと語ることもできなくなる。

それでも、頭の片隅に眠っていた夢のかけらを掘り起こして、ぽつぽつと語り始める。その時の表情はみんな思春期の少年少女のようだ。漠然とした思いを言葉に結晶化させることで、未来への道筋が開かれていく。

私はこれまで、海外在住邦人や日本に住む外国人など異文化を生きる人々のメンタルヘルスに関わってきた。また、ここ数年は性暴力などトラウマを受けた人たちの回復支援にも関わってきた。いつもニコニコと悩みがないように見えても、端からはいいかげんに生きているように見えても、薄皮をはがせば血が吹き出そうな痛みを抱えている人は多い。それでも毎日の生活をなげださず、ささやかな夢を持って、新たな環境に立ち向かっていこうと努力する人たちの姿は、かけがえがなく美しい。

けれども同時に私は、彼らがこれからの世の中にどんな夢を見だしていけるのか不安でもある。グローバリゼーションの流れは、地球上から境界が消え、誰もが自由に移動し交流できるようになるという錯覚を与えがちだ。たしかに境界の流通性は増すかもしれないが、実際に自由に行き来できる者とできない者との格差はより激しくなっていくに違いない。

また今年の同時多発テロ以来、全てをコントロールの範囲にとどめておきたいという強迫的な思いが、世界を覆っているようにも思う。

アウグスティヌスの言葉に「人間社会は、各人が他人とは違う存在であることを自覚している個人の集合、つまり住民すべてが異邦人ともいふべき異邦人国家に移行すべきである」(『神の国』18巻1章)というものがある。テロリズムとは恐怖による操作であるが、異質なものを排除することで恐怖は取り除けないことは、早くから知られていたようだ。

異文化との遭遇も、トラウマからの回復も、不確実性に堪え、闇を見つめ、そこに希望を見出すことから始まる。喪失の悲しみに反応し未知の不安に打ち震える自身の心と身体を、抑え込むのではなくそのまま慈しむことによって。